

いよいよ3月、年度末です。季節の変わり目、この教会もいよいよ佐々木良子先生をお迎えする日が近づいて来ました。今週の水曜日から、遅い受難節に入ります。流れる日々の中で、自分自身の立っている場所を見失うことがありませんように。

一応まじめな人

ルカの講解説教は2018年8月から始まりました。7年目にして、いよいよ今年で完結となりそうです。福音書のクライマックスであるイエス様の受難の記事には、心が締め付けられる思いですが、集大成としては、やはり避けて通れません。今回は祭司長と長老たち、今朝はピラト、次回はヘロデ、悪役のオンパレードです。

悪役（ヴィラン）にも、色んな種類がありますが、その中でポンテオ・ピラトは「一応まじめ」なのです！でもそれは、「まだまし」という役ではなく、むしろ一番タチが悪いかもしれません。歴史家によれば、彼は残忍冷徹、頑固者で収賄や冒涇を行い、強奪、虐待も辞さないシリア総督と記されています。その評価となった事件が2、3あるのですが、最後は彼は大祭司カヤパと共に罷免されます。解任後は旅をしたのち自害したとあります。

ポントは黒海、ピルムは投げ槍の意味です。一説では彼は貧しい家の出身で、軍人として出世しました。野蛮人の迷信を軽蔑し、高圧的で搾取を当然としました。当時の有識者、ローマ市民として、平均的な人物です。「帝国の歯車」となった一人の、哀愁が滲みます。そして、歴史は彼を忘れてあげてを許さず、永遠に、救い主を十字架につけて殺した失格者として、語り継がれる不名誉を背負ったのです。彼は、「私は、この人は悪くないと言った！」と地の底から叫び続けているのでしょうか。

サーバント・リーダーシップ

サタンは「訴える者」です。妬みや憎しみ、悪魔が言い張るしつこさの前に、人のまじめさや肩書きなど、歯がたたないことを私たちは心に刻まなければなりません。特にリーダーとして立てられた時、自分自身の内面に、本当に何が求められているかを突き詰めて考えることが、本当に大切です。サーバント・リーダーシップという新しい（聖書に基づくという意味では古い）教えは、ジェネラリストではなくスペシャリストになりなさいと言います。もしも、ピラトが心に浮かんだ「この人は罪人ではない」という光を貫いたなら、彼の人生は変わっていたでしょう。もちろん、帝国の歯車は軋み、彼自身の地位と名誉は、イエス様の十字架と同じ底辺に叩きつけられたでしょうが、その犠牲を払ってあまりある、自分自身の生きる意味を得たでしょう。

イエス様の言葉は「その通りです」という一言です。あきらかに次元の違う世界の言葉に、イエス様は全存在をかけて、私たちを救い出そうとしてみてください。